

五行大義と道教

中 村 璋 八

Wu-hsing-ta-i and Taoism

Shohachi-NAKAMURA

一、序 説

隋の蕭吉の撰である「五行大義」⁽¹⁾は、先秦より隋に至る迄の五行説を輯集し、それを体系化した、五行説に関する最も優れた文献である。そこで、この書の中には、当然のことながら各時代の五行に関する説が、広い範囲の文献から極めて多く引用されている。それは、巻一、159条、巻二、52条、巻三、146条、巻四、119条、巻五、205条合計、681条にも達する。

そして、これらの引用文は、隋の時代の、それぞれの文献の姿を割合に忠実に伝えており、資料的価値の高いものが多い。このことは、既に清朝の考証学者、許宗彦(嘉慶刊本序)孫星衍(孫氏詞堂書目・尸子)阮元(擘經室外集)朱右曾(逸周書集訓校釈)陳喬樞(韓詩遺説考・齊詩翼氏学疏証)、また、民国になって劉家立(淮南内篇集証)などが指摘し、それぞれの考証に資したのを始め、緯書の輯佚書、七緯(趙在翰)や黄氏逸書考(黄奭)も、五行大義所引の緯書佚文を新資料として輯集している。私も、その中の、特に經書に就いては、「五行大義の經書学的研究」⁽²⁾として、既に検討を加えたことがある。

五行大義中には、これら既に検討されたものの外にも、未だ多くの貴重な資料が引存する。本論では、そのうち、道教関係の資料を考察してみたい。

二、五行大義中の引用書

五行大義に引存する資料は、五行説が諸家に浸透して行った跡を示していると同時に、五行説が時代と共に変容したことをも話っており、更には、その中には、当時、盛行していたと推せるが、宋代以後、逸したと思われる佚書・佚文も多く含まれている。そこで、煩を厭わず、その引用文献の大体を列挙すると、次の如くである。 註（ ）内の数字は引用条数、

經 類

易・周易 (21) 易繫辭・易上繫 (2) 說卦 (1) 孔子 (2) 鄭司農 (1) 鄭玄 (3) 馬融 (1) 京房 (1)

尚書 (6) 尚書洪範篇・尚書洪範・洪範 (5) 禹貢 (9) 尚書大伝 (3) 洪範伝 (1) 洪範五行伝・五行伝・伝 (5) 尚書夏侯歐陽説 (1) 古文尚書説 (1) 王肅 (1)

詩 (6) 毛詩序・詩序 (2) 韓詩 (1) 毛公伝説 (1) 翼奉 (6)

礼・礼記 (16) 礼記郊特性・礼記礼運篇 (2) 礼記月令篇・礼記月令・月令 (含鄭玄注・12) 楽記 (2) 鄭玄注 (10) 蔡邕月令章句・蔡邕・蔡伯喈 (5) 周礼・周礼天官・天官・周官 (8) 大戴礼・大戴礼觀人篇 (6) 鄭玄 (衆) 婚礼謁文 (1) 三礼義宗 (27)

春秋 (1) 左伝・春秋伝・左伝子産・子産・伝 (8) 杜子春秋医和 (1) 服虔解・服注左伝 (2) 鄭玄 (1) 公羊高 (1) 穎容春秋积例・穎子敞春秋积例・穎容 (3) 春秋繁露・董仲舒 (8) 外伝解 (1)

孝經 (3) 孝經孔安国伝 (1) 孝經述義 (1)

論語郷党 (1) 孔子 (9) 家語 (17) 孔子 (13) 註 孔子の前者は論語の句、爾雅 (6) 広雅 (1) 积名 (9) 白虎通 (12) 許慎五經異義 (1) 許慎 (13) 説文 (5) 方言 (2)

易緯乾鑿度 (1) 鄭玄注乾鑿度 (1) 易通卦驗 (5) 尚書考靈曜 (5) 尚書刑徳放 (2) 尚書緯 (1) 詩推度災 (2) 詩緯 (1) 礼含文嘉 (5) 礼斗威儀 (2) 礼稽命徴 (1) 楽緯汁凶篇 (1) 楽緯 (6) 春秋元命苞 (25) 春秋

文耀鉤（6）春秋考異郵（8）合誠圖（4）春秋運斗樞（2）春秋命曆序（1）
命曆序宋均注（1）春秋潛潭巴（1）春秋佐助期（1）感精符（4）說題辭
（2）衍孔圖（2）保乾圖（1）春秋緯（2）孝經援神契（7）孝經鉤命決
（2）河圖汗光篇（1）河圖（6）錄圖（2）

史 類

史記（2）予讓（1）律書（1）漢書五行志（3）漢書天文志（4）漢書律
曆志（2）漢書禮樂志（1）漢書翼奉奏事（1）統漢書（2）周書（3）國
語（2）洞紀（1）帝王世紀（7）帝系譜（2）陶華陽（2）三五曆紀（2）
太康地記（6）越記（2）方伎伝（1）史書（1）

子 類

曾子（1）太玄經（5）物理論・陽泉（5）老子（2）河上公解老子・河上
公注老子・河上公章句（4）老子經（4）文子（6）庄子・莊子（2）道家
三皇經（1）道家大式經（2）道家太平經（1）道家（2）道經義（1）管
子（3）慎子（1）尸子（6）呂氏春秋・呂氏（9）淮南子（含注・39）論
衡（1）

太公兵書・太公・兵書（7）黃帝兵決（2）甘公星經・星經（3）石氏天官
訓解（1）虞錄（1）黃帝九宮經・九宮經（3）太一（1）管輅（1）集靈
經（1）龍首經（1）孔子元辰經（3）京房別對・京房等說（2）遁甲經
（1）六壬式經（1）玄女式經（1）式經（7）禽變（3）射覆經（1）柳世隆
龜經・柳世隆（3）史蘇龜經（2）龜經（2）郭璞易占（1）趙怡（2）黃
帝斗圖（1）黃帝八神圖（1）五行書（4）五行十雜（1）季氏陰陽說（1）
相經（1）相書（2）祿命決（1）祿命書（1）左慈相決（3）相秘決（1）
高唐隆（1）黃帝素問・素問（9）黃帝甲乙經・甲乙經・甲乙（5）本草（1）
八十一問（2）黃帝養生經（6）王簡（1）本生經（15）

そ の 他

書（2）經（5）一解（1）一（14）そのほか書名の記してないもの（若干）

以上の引用資料の中には、芸文志・経籍志などの歴代の目録類に、その記載が存せず、その性格を明確にはし得ないものも若干存する。これらの中で、本稿で問題とする道教経典であることを明記している資料は、道家三皇経・道家太平経・道家大式経と単に「道家」と記しているもの、併せても甚だ尠いと言わざるを得ない。併し、そのほかに太玄経・老子・河上公章句・老子経・道経義・文子・淮南子・星経・黄帝九宮経・集靈経・孔子元辰経・龍首経・遁甲経・六壬式経・玄女式経・射覆経・柳世隆亀経・史蘇亀経・黄帝斗凶・黄帝八神凶・相経・相書・禄命決・禄命書・左慈相決・相秘決・黄帝素問・黄帝甲乙経・本草・八十一問・黄帝養生経など所謂「道蔵」に収められているか、または、道蔵と密接な係わりを持つと思われる典籍が多く見える。この五行大義が撰せられた隋代は、吉岡義豊博士も「仏教史においても隋代は重要な転換期であるが、道教史においても隋代は注目しなければならない」⁽³⁾と指摘されるように、道教において重要な時代であり、五行大義中に引存する道教関係資料を考察することは、それなりに意義のあることと思う。

三、道教と陰陽五行説

前節の如く、五行大義中には、道教経典やそれと係わりを持つと推せる典籍よりの引用が見え、五行大義と道教との関係が粗でなかったことが示されている。

隋書経籍志の道経叙録には、

而又有諸消災度厄之法，依陰陽五行数術，推人年命書之。

と記されるなど、道経が、陰陽五行説に拠って説かれていたとの指摘がなされている。また歴世真仙体道通鑑によって歴代の道士の伝を検すると、

○西嶽真人馮長，字延寿，驪山人也。年十五，即通陰陽占候之書。（卷9）

○左慈，字元放，廬江人，少明五経，兼通星緯，（中略）乃学道術，尤明六甲（卷15）

○隱居先生，姓陶，名弘景，字通明，丹陽人也，（中略）尤好五行陰陽，風角氣候，太一遁甲，星曆算数，山川地理，方国所産。（卷24）

○太史真君，姓許氏，名遜，字敬之，曾祖琰，祖王父肅，世居許昌，（中略）

為学博通經史，明天文地理，音律五行，讖緯之書，尤嗜神遷修煉之術。(卷26)

○道士梁謹者，字考成，京兆扶風人，博通經史，雖陰陽占候之術，靡不精究。
(卷30)

○法師馬儉，字元約，京兆右扶風人，(中略)時十七歲，遂授以道要，其經史之瞻，則五符真文三皇內文道德靈寶衆經遁甲占候之法，其藥術之妙，則斷穀服水餌棗膏天門煎朮煎商陸酒五方雲牙六甲符諸天內音行氣導引之方。(卷30)

○北齊由吾道榮，(中略)少為道士，聞晉陽有人大明法術，尋訪得之，其人道家符水禁呪陰陽曆数天文藥性，無不通曉，悉授道榮。(卷33)

○九天玄女者，黃帝之師，聖母元君弟子也。(中略)相尋各拋方位，自称五行之号，太皞之後，自為青帝，榆岡神農之後，自号赤帝，共工之後，自号白帝，葛天氏之後，自号黒帝，帝起有熊之墟，自号黃帝。(後集卷2)

○太陽女者，姓朱，名翼数，演五行之道。(後集卷2)

などの記載がある。これらは一例に過ぎないが、これらに拠ると、馮長・左慈・陶弘景・許太史・梁謹・馬儉・由吾道榮・または九天玄女・太陽女などが、それぞれ陰陽五行説を修め、また、陰陽五行説に拠って論をなしていたことが解る。

このように道士達が、陰陽五行説と密接な係わりを持っていたと共に、道教經典の中にも、この陰陽五行説を用いた論が随所に見い出せる。その一例を挙げると、

○道言天之五緯，地之五經，人之五行，乃自然之物也，惟四象聚中，金丹光燁，陰陽交合，二儀配形，始有升降，夫金盈生水，水始化，故曰炁水也，炁水者，動而以則炁，静而形則水，水有大利，能生万物，故為万物之精也，水成則火聚，龍行其先，虎行其後，四象合一，五行聚焉。(太上元寶金庭無為妙經，第十，五行章第十五)

○木性強直，火性猛烈，土性仁和，金性嚴毅，水性謙退。(秤星靈台秘要經，明五行之性各異)

○(五行相推返帰一)五行謂金木水火土，相推者，金生水，水生木，木生火，火生土，土生金，周而復始，互相尅法，火尅金，金尅木，木尅土，土尅水，水尅火，周而復始。相推者，道也，返帰一，一者水数也，五行之道，万物之

宗。(黄庭内景玉经註, 五行章第25)

○如伝持五行式, 立春木旺, 立夏火旺, 立秋金旺, 立冬水旺, 四季日土旺用事, 木旺日夜受木式, 火旺日夜受火式, 金旺日夜受金式, 水旺日夜受水化式, 四季旺日夜受土化式。(太上六壬明鑑符陰經卷1. 五行式)

○金仮第一, 西方庚辛, 白虎之神, 九曜之尊太白(中略)木仮第二, 東方青龍, 屬於甲乙, 春之令, 歳星之兵, (中略)水仮第三, 北方壬癸, 子之位, 玄武為君, (中略)火仮第四, 南方朱雀, 位屬丙丁, 熒惑, (中略)土仮第五, 中央戊己, 万物之位, 三魄養土, 土能生物。(元陽子五仮論)

○然春也青帝神氣太平, 夏也赤帝神氣太平, 六月也黄帝神氣太平, 秋也白帝神氣太平, 冬也黒氣神氣太平。(太平經卷93)

などである。これらは, 五行説やその配当を記したものであるが, また,

○丙午丁巳祖始, 丙午丁巳火也, 丙午者純陽也, 丁巳者純陰也。(太平經卷39)

○洞曰, 丁火者, 甲木之女也, 而曰天庭至宝, 己土者, 丙火之女也, 而曰圭丹靈藥, 辛金者, 戊土之女也, 而曰白虎真晶, 癸水者, 庚金之女也, 而曰水郷紅鉛, 乙木者, 壬水之女也, 而曰亀精鳳髓。(上方靈宝元極至道開化真經卷3)

など十干・十二支に配して説かれていも条も多い。更に,

○或問道五味有所傷不, 老子曰, 鹹傷血, 酸傷髓, 甜傷肺, 辛傷心, 苦傷精, 夫五味各所傷, 要取入口, 味和為甘。(顯道論第9)

○八素云, 春宜食辛, 夏宜食鹹, 長夏宜食酸, 秋宜食苦, 冬宜食甘肥, 皆益五蔵, 而散邪氣矣。(修真秘録, 食宜篇)

など五味と養生の關係を述べた条も多い。この五味については, 次の五蔵と共に, 五行大義中にしばしば論ぜられている。五味と密接な關係を持つ五蔵については,

○是以天有五行, 人有五蔵, 食有五味, 故肝法木, 心法火, 脾法土, 肺法金, 腎法水, 酸納肝, 苦納心, 甘納脾, 辛納肺, 鹹納腎, 木生火, 火生土, 土生金, 金生水, 水生木, 木制土, 土制水, 水制火, 火制金, 金制木, 故四時無多食所王并所制之味, 皆能所王之蔵也, 宜相生之味助王炁也。(保生要録, 論飲食門)

○五味所入, 苦入心, 辛入肺, 酸入肝, 甘入脾, 鹹入腎。(修真精義雜論, 慎忌論)

と、その両者の関係が記されている。不老長生を、その重要な目標とする道教にとって、人間の体の主要な部分、即ち五蔵とその働きの原動力となる食物の持つ五味とは、極めて大切なものであった。これを五行説に拠って説いたのが、以上の記述である。また、五蔵については、更に、

○腎蔵於精，心蔵於神，肝蔵於魂，肺蔵於魄，脾蔵於智。（太上洞神玄妙白猿真經，五仮呪）

○凡人肝蔵魂，肺蔵魄，魄蔵志，心蔵神，腎蔵精，若六腑不和，則五蔵傷。（攝生纂録）

などと、五蔵には、それぞれ精・神・魂・魄・智（志・意）が蔵されている、との記載も有する。これらも後に論ずる如く五行大義中に屢々見られる記述である。そして、また、

○老君經云，貧欲無数，無数之慾，念念叢生，不可勝言。大略有五。一目欲觀五色，色過則魂勞。二耳欲聞五音，音繁則魄苦。三鼻慾嗅五香，香溢則精流。四口欲甘五味，味豊則神濁。五身欲恣五体，体慢則志散。志散則脾傷而行危，神濁則心乱而口爽，精流則腎虚而迷狂，魄苦則肺損而耳聾，魂勞則肝困而目盲，五者混闇，則身滅命亡，五者淨明，則体全年永，（道典論卷3，五欲）

と、五色・五音・五香・五味・五体の所謂「五欲」に就いての記載もある。これらは、何れも五行説に拠るものであることは説明を要しないことと思う。

これらの一部の例に拠っても解るように、道教経典の中には、五行とそれと関連を持つ十干・十二支・五味・五臓などの記事が到る処に見存する。これは、道教が、その教理の中に、中国思想の思想律とも言える五行思想を、如何に多く取り入れていたかを示すものであろう。

四、五行大義中の道教経典

このように道教経典の中には、五行思想に基づいてなされる論が極めて多い。そこで、道教の盛行した六朝時代の資料を最も多く駆使して編した五行大義中にも、当然、当時通行していた道経からの引用が存して然るべきである。併し、明らかに道経よりの引用であることを記した条は、次の如き例があるに過ぎない。即ち、

- (1)道家三皇經，以五藏神為五魂，六府神為六魄。〔此亦五行六氣之義也〕(卷3，論配藏府)
- (2)道家太平經曰，肝神不在，目無光明，心神不在，脣青白，肺神不在，鼻不通，腎神不在，耳聾，脾神不在，舌不知甘味。(卷3，論配藏府)
- (3)道家大式經云，天曰洞視，主目，目主肝，天陽也，肝亦陽，目精明亦陽，目光顯見，兼有常法，如日陽精無欠而明也。(卷3・論配藏府)
- (4)大式經曰，地曰洞聽，主耳，耳主腎，地陰也，耳法虛則納声，水主虛，陰主虛，陰主幽，陰声又非恒，如月盈虛也。(卷3，論配藏府)
- (5)道家，鼻主心者，陽也。(卷3，論配藏府)
- (6)又(道家)一説云，目主肝，耳主腎，鼻主心，舌主脾，口主肺。(卷3，論配藏府)
- (7)道經義云，魂居肝，魄在肺，神処心，精藏腎，志託脾。(卷3，論配藏府)

これらの条は、全て卷三、第十四論雜配、第四論配藏府に集中して見えている。いま、それぞれに就いて検討してみよう。

まず、道家三皇經は、既に福井康順博士が指摘⁽⁴⁾されるように、北周の道安が「晋元康中、鮑靚、造三皇經被誅、事在晋史、後人諱之、改為三洞」(二教論、明典真偽第十)と記しているのや甄鸞が「鮑靚、造三皇、事露而被誅」(笑道論卷下)と述べていることから考えて、北周には明確に存在していた。この三皇文、三皇經(又は、大曆三皇經、洞神三皇經、洞神經)は、無上秘要・真誥・三洞珠囊・上清同類事相・道教義枢・一切道經音義妙門由起・雲笈七籤⁽⁵⁾などに、その引用が見存する。併し、五行大義所引に類する文は見い出せない。また、宋代の輯である太平御覽にも、多く引用されているが、それらにも見えない。更に現存の「道藏」にも、三皇經に類似するものとして「太清金闕玉華仙書八極章三皇内秘文」(三卷本)と「三皇内文遺秘」⁽⁶⁾とがあるが、両者共に五行大義所引の三皇經の文は見えない。三皇經⁽⁷⁾は、唐の貞觀22年(648)に禁断されていることが、唐の集古今仙道論衡卷丙や法苑珠林卷55に見えている⁽⁸⁾。すると、唐代に形を変えたことは、当然考えられ、五行大義所引の三皇經は、それ以前の三皇經であることになる。福井博士は、三皇文と三皇經には、抱朴子が尊重している「古三皇文」と陶弘景が真本ではないという偽三皇文、即ち「三皇經」

と、現にあるところの「三皇内秘文」と「三皇内文遺秘」との少くとも四つの異本がある⁽⁹⁾、と論じておられる。五行大義所引の三皇経は、現存の後の二本でないことは勿論、鮑靚の作とされる三皇文でもなく、陶華陽(弘景)の引用文もあり、彼の影響を受けていることから考え、その流れを汲む陸修静の作とされる三皇経(今三皇文)の型を伝えたものと推せる。そして、前述の如く他には見えない佚文である。

次に道家太平経は、その来歴が古く、甘忠可の「天官歴包太平経12巻」や干吉の太平経、即ち「太平清領書170巻」など、既に漢代より存した。そして現在、道蔵中には「太平経119巻」の内、「57巻」が収められている。漢代に通行した甘忠可や干吉の太平経と現存のそれとは、福井博士も指摘される⁽¹⁰⁾ように、太平経は、一度は失われて「宋梁以来」求めたが得られず、梁の陶弘景の弟子という桓法闡の後、陳の宣帝の時、周智響なるものに伝承されて行った、と考えられる。この陳の周智響に拠って伝えられた太平経(太平洞極経170巻)と現存の太平経とが同じものである、とすることにも問題があり、現存の太平経成立は、恐らく元以後であることは、既に福井博士の詳細な考察⁽¹¹⁾がある。併し、両者の間には、何らかの関係があったことも考えられる。現存本は、多分、唐宋時代に残存した太平経の断片を雑輯したものであろう。

いま、五行大義所引の道家太平経の文を検すると、道蔵本太平経残巻や、それよりもやや古い唐末の道士、閻丘方遠の作とされる太平経鈔10巻、または太平経聖君秘旨1巻には、ただ単に「五蔵神」の語や、五帝・五霊・五蔵など五行説に関連する句は、若干、見存するが、その内容を具えた文は全く見い出せない。このことは、もともとこの文が太平経に存したであろうことを示すと共に、現在は佚したことを語っていると考えられる。そこで、五行大義所引の文は、梁・陳の際に成立した太平経の佚文であり、梁の後裔である蕭吉⁽¹²⁾が、何れかの時期に、その梁・陳の際の太平経を取得し、それを秘蔵して、五行大義を撰する時に、その書を引用したとは考えられないであろうか。

次の道家大式経は、その名が、現存の道蔵中にも、それに類する書名さえ見えず、また、諸道教経典にも見存しない。しかし、五行大義中には、明らかに「道家」の名を冠して二条引用されており、誤写とは考えられない。そこで、

更に歴代の芸文志・経籍志など目録類を検するも、また、そこにも、それに類する書目も見い出せない。すると、この書は、五行大義以外には、その名の見えない道教経典ということになる。この天地、五蔵・五官(耳・目・鼻・口・心)の関係を論じた大式経の文は、道教経典には、屢々見えるもので、これが道教経典であることは、当然考えられる。すると、隋代には、大式経という道経が伝存していたが、それは、他の道教経典にも引用されず、そのまま佚してしまったと考えられはしまいか。このことは、五行大義中に佚書・佚文が多く存することからも考えられることであろう。

以上のように書名を明記している条のほかにも、単に「道家」または「道家一説」とのみ記すものも見存する。前者は、道家大式経に「目主肝」「耳主腎」とあるのに対し、「鼻主心」とあることから推して、或は大式経の句ではないか、とも思われ、後者も、また、太平経の説に対し、「又一説云」とあることから、太平経とは、若干、意見を異にする「大式経」の説を、一説という型で併記したと考えられないであろうか。

最後に道経義は、老子道德経を、前篇「道経」後篇「徳経」と普通上下二篇に分けていることから、この句は、前篇「道経」の「成象第六」中の「谷神不死」の「義」、即ち注と考えられないであろうか。この句は、後に挙げる老子河上公注に類似の句があり、或は、隋代に伝存していた河上公注に類した老子の注釈書の一つからの引用と推すのが妥当と思われる。元の至元中の撰とされる道蔵闕経目録には、「道経大義」の名が、抱朴子、内篇には「道機経、観世軍督王図撰」の名が見える。これらの書名は「道経義」と類するようにも見えるが、これらの相互の関係に就いては、今は検討する方法がない。

五行大義に引用される道教経典は、以上の如く全て「五蔵」に関する記事のみに限られている。これは如何に理解したらよいのであろうか。道経中には、(三)で指摘したように五行説に関連する記事は「五蔵」だけには限らない。このような中であって「五蔵」のみが特に挙げられていることは、これが道教経典の中で最も重要な位置を占めていたからではあるまいか。道教の教理は、不老長寿を求める神仙思想を中核としている。この人間の最も強く希求するものである不老長寿は、人間の身体の中で最も主要な働きをする五蔵に拠って左

右される。そこで、道経においては、この五蔵を最も重んじ、その反影として五行大義中にも、この五蔵の記事が、特に取り上げられたのではあるまいか⁽¹³⁾。

五、五行大義中の老子河上公注

次に注目すべきは、「老子河上公注」である。この五行大義所引の河上公注については、既に楠山春樹教授が「老子河上公注の成立」⁽¹⁴⁾で論語義疏・金楼子などの六朝期の資料と共に詳細に考察されているので、改めて論ずる必要もないと思うが、五行大義中の他の資料との関連の上で、二、三の蛇足を加えてみたい。

五行大義中に「河上公注」として引用されているものは、次の如き条である。

- (1)河上公解老子言，躁氣在上，陽氣伏於下，所以故寒。靜氣在上，陰氣伏於下，所以故熱。〔人体陰陽，義亦如是。春夏舒散，陽氣開發，宜以溫食用和陰氣。秋冬閉斂，陽氣在內，宜以寒食以調陽氣。冬兼水火，又異於秋，正以蔵閉之時，事甚於秋。故均以水火也。〕(卷3，論配氣味)
- (2)河上公注老子云，肝蔵魂，肺蔵魄，心蔵神，腎蔵精，脾蔵志，五蔵尽傷，則五神去矣。(卷3，論配五蔵)
- (3)河上公章句云，五氣清微，為精神聽（版本改聰）明，音声五性，其鬼曰魂，魂者雄也。主出入於鼻，与天通。五味濁滯，為形骸骨肉，血脉六情，其鬼曰魄，魄者雌也，〔主〕出入於口，与地通。(卷3，論配五蔵)
- (4)河上公章句云，五性之鬼，曰魂為雄，六情之氣，曰魄為雌。〔此明性陽性陰也。〕(卷3論性情)

以上のほか「河上公」とは明記してないが、「老子経」として引用しながら、実は河上公注と推せるものに、次の2条がある。

- (5)老子経云，天〔食人〕以五行氣，從鼻入，蔵於心。鼻以空通，出入息，高象天。故与天通，而氣蔵於心也。(卷3，論配五蔵)
- (6)老子経云，地飴人以五味，從口入，蔵於胃。舌之所納，則有津実，地体既是質実，品味皆地之所産，故舌与地通。(卷3，論配五蔵)

更に、これらの説を、五行大義は、次のように記した箇所も存する。

- (7)老子経及素問云心蔵神者，神以神明照了為義，言心能明万事，神是身之君象

火，已如前解，腎藏精者，精以精靈叡智為稱，亦是精智氣，腎水智巧，故精藏焉。脾藏志者，志(版本改脾)土，土(版本改主)綰四行，多所趣向，志以心願趣向為目，肝藏魂者，魂以運動為名，肝是少陽，陽性運動，木性仁，故魂亦主善，故藏於肝焉。肺藏魄者，魄以相著為名，肺為少陰，陰性恬靜，金主殺，魄又主惡，故以藏之。(卷3，論配五藏)

(8)老子經云魂藏肝・魄藏肺者，魂既屬天，天氣為陽，陽主善，尚左，居肝，在東方木位。魄既屬地，地氣為陰，陰主惡，尚右，故居肺，在西方金位。(卷3，論配五藏)

(9)老子云，吉事尚左，凶事尚右，亦云五氣藏於心，五味藏於胃者，此論氣則是陽，以藏受之，心為火藏，陽氣所處，味則是陰，以府受之，胃為五穀之府，味之所處，心主精神，胃主受納，不乖魂魄陰陽之理。(卷3，論配藏府)

五行大義中には、以上のように「河上公注」または「老子経」として、河上公注を引用してあるが、以下、それぞれの条に就いて、若干、検討してみよう。

まず(1)の「河上公解老子云」の文は、楠山氏も指摘するように洪徳第45の「躁勝寒」及び「静勝熱」の河上公注、

勝極也，春夏，陽氣躁(応本作𨔵¹⁶下同)疾於上，万物盛大，極則寒，寒則零落死亡也。言人不当剛躁也。(敦本無也字) 秋冬，万物静於黄泉之下，極則熱，熱者生之源也。(敦本・叢本無也字)

に相当するものであろう。併し、両者は文も意味も甚だ異っている。即ち、現行本は「勝」を「極まる」の意に解し、春夏は、陽気が上であわただしく活動するから、万物は盛大になる。しかし、躁(さわがしさ)が極まれば、秋冬の寒になり、万物を零落死亡させる、と言うのは、人が気が強く、短気でなくなるからである。秋冬は、万物が黄泉のもとで静かになる。静(しずかさ)が極まると、春夏の熱となり、万物生成の源となる、としている。これに対し、五行大義所引の(1)は、躁気が上にあったならば、陽気は下に伏してしまふ。だから寒くなる。静気が上にあったならば、陰気は下に伏してしまふ。だから熱くなるのである。この説を人体の中の陰陽と結び付けて、それぞれの季節に取るべき食物に就いて述べている。すると「勝」は「まさる」と読み、躁がまさると寒になり、静がまさると熱になる、となるのであろう。この両者の相違は、

ただ単に字句や表現だけに止まらず、その構想においても非常な違いがあるとすべきであろう。そこで、楠山氏は、この事実から六期末当時における河上公注には、或は二種以上のテキストが行われており、少くとも河上公注の本文が、現状のそれとしてまだ完全には定着していなかった、と論じている。

(2)の河上公注老子云の文は、成象第6「谷神不死」の注で、現行本には、
 谷養也。人能養神則不死也。神謂五蔵(陳本作臟)之神也。肝蔵魂，肺蔵魄，
 心蔵神，腎蔵精(道本精下有興志二字)，脾蔵志，五蔵尽傷，則五神去(足本去下
 有之字)矣。

とあって、五行大義所引と全く同じである。この説は、その後の「道蔵」所収の道経には多く見い出せる。例えば、撰生纂録第12(洞玄部，衆術類)に、

凡人肝蔵魂，肺蔵魄，脾蔵志，心蔵神，腎蔵精，若六腑不和，則五蔵傷。
 とある。これなどは、河上公注に拠ったとも推測できる。

(3)の「河上公章句云」の文も、同じく成象第6の「是謂玄牝」の注で、現行本は、

言不死之道(叢本作有)，在於玄牝。玄天也。於人為鼻。牝地也。於人為口。
 天養人以五氣，從鼻入，蔵於心。五氣(集本作蔵)清微，為精神聰明，音声五
 性。其鬼曰魂，魂者雄也。主出入於鼻(足本・応本・陳本作人鼻)，与天通。故
 鼻為玄也。地食人以五味，從口入，蔵於胃。五性(応本作味)濁溽(作人鼻応
 本作乱，陳本・敦本作集)，為形骸(陳本作体)骨肉，血脈之情，其鬼曰魄，魄者
 雌也。主出入於口，与地通，故口為牝也。

とある。五行大義所引は、この注の一部を引用したものであることは明らかであり、その文字、意味において大差はない。

(4)の「河上公章句云」の文は、楠山氏の論文では取り上げていないが、この文も恐らく(3)と同じく成象第6の「是謂玄牝」の注の一部、

音声五性，其鬼曰魂，魂者雄也。(中略)血脉六情，其鬼曰魄，魄者雌也。
 に依拠したものと思われる。併し、その文には、若干の相違が認められる。すると(2)(3)の例が、現行本と極めて似ているのに対し、(4)の文は、(3)と同じ箇所注であると推せるに拘わらず、若干の異同があることとなる。これは、(1)の例のように、五行大義所引の河上公注は、現行本とはや

や異り、未だ、その注文が定着していない時期のテキストの型を伝えていると考えてよいのではなかろうか⁽¹⁷⁾。

(5)と(6)は、共に「老子経云」に作っているが、何れも前に掲げた成象第6の「是謂玄牝」の河上公注と、若干の文字の異同を除くほか、その内容は近似しており、河上公注よりの引用として誤りはないと推せる。すると河上公注を五行大義では、また「老子経」とも呼んでいたことになる。

このことを更に証明する根拠として(7)と(8)の例がある。この两条は、(2)の「河上公注老子」の文を、蕭吉が、五行説に拠って更に説明を加えたものとも推せるか、或は、また、その解釈は、蕭吉の説ではなく、当時、伝存していた注に依拠したとも考えられる。(7)の「素問」は、黄帝内経素問、卷7、宣明五氣篇第23に

五蔵所蔵、心蔵神、肺蔵魄、肝蔵魂、脾蔵意、腎蔵志、是謂五蔵所蔵。とあるのを指していると思われる。ただ、河上公注が「腎蔵精、脾蔵志」としているのに対し、素問は「脾蔵意、腎蔵志」となし、若干異っている。蕭吉は、老子注に主として拠ったのであろう。それはさておき、この「老子経」も、また河上公注を指すことは明らかである。

(9)は、老子第31章の「吉事尚左、凶事尚右」に続いて記されたものであるが、やはり、前掲の河上公注の

天食人以五氣、從鼻入、蔵於心、(中略)地食人以五味、從口入、蔵於胃。の文に拠ったと推せる。

この(5)(6)の「老子経」の例、または(7)(8)(9)の前には「河上公注」としながら、後文で「老子経」または「老子」に作っている例から推すと、五行大義では、「河上公注老子」を、特に「老子経」としていたことになる。

このことは、日本に伝存する旧鈔本老子河上公注、即ち足利学校遺蹟図書館本・応安六年鈔本など⁽¹⁸⁾には「老子経序」と称する序文がついており、また、隋書経籍志に、

老子道德経二卷、周柱下史李耳撰、漢文帝時、河上公注、梁有戦国時河上丈人注老子経二卷、(以下略)亡。

と、梁の阮孝緒の七録を引いているが、この梁に存したとされる河上丈人注は、明らかに「老子経」に作っている。南朝、梁の王朝の後裔である五行大義の撰者、蕭吉⁽¹⁹⁾は、江陵が陥ちると共に北朝に移り、その後、六十余年間、西魏・北周・隋に仕官して、北学の影響も受けてはいるが、その経学は、南学を主としていたことは、既に拙論「五行大義の経書学的研究」⁽²⁰⁾の中で指摘した通りである。そこで、老子注も南朝に伝存していたテキストと何らかの係りを持っていたであろうことは考えられる。すると、五行大義所引の「老子経」が、隋志の引く梁の「河上丈人注老子経二卷」であったであろう、と言う推測も成り立つ。では、これと「河上公注老子」または「河上公章句」との関係は、如何に理解すべきであろうか。この両者の関係に就いては、既に楠山教授の論文⁽²¹⁾があり、筆者が、これ以上論ずることも出来ないので、今は、それに譲り、ここでは、二、三の疑問を提出するに止めたい。

六、その他の道教関係資料

「道家」の名を冠する三皇経・太平経・大式経・及び老子河上公注のほかにも、五行大義中には、所謂「道蔵」に納れられている莊子(続, 正一部)太玄経・淮南子(共に太清部)本草(洞神部・靈図類)など道教関係資料が多く見られる。そこで、それらを掲げると、次の如くである。

遁甲経は、秘蔵通玄変化六陰洞微遁甲真経として洞神部、方法類に収められている外、抱朴子内篇、登涉卷17に「太乙遁甲」の文が、九天秘記と共に引用され、また、雲笈七籤卷3には「六甲三元遁甲造式法」が、同卷100には「遁甲」の語が見えるなど、道教では、この遁甲を受け納れていたことが示されている。

集靈経は、洞真部、本文類(太上三十六部尊経所収, 清境経下)に、その書が見え、また道蔵闕経目録(正一部)にも「大道中仙集靈経10巻」として名を留めているほか、雲笈七籤卷85にも「集靈経」の文が引用されている。

竜首経は、洞真部、衆術類に、黄帝竜首経として収められているほか、抱朴子内篇、極言卷13に「竜首記」の引用か、また、雲笈七籤卷100にも「竜首記」の名が記されている。

星経も、洞真部、衆術類に、通占大曆星経として納れられ、また、茅山書目にも「星経5巻」が記載されている。

玄女式経や六壬式経などに類する書は、黄帝授三子玄女経（洞真部、衆術類）太陰玄女経（洞玄部、衆術類、黄帝太一八門逆順生死訣所収）や六壬六癸之符（抱朴子内篇、卷14）黄帝六壬式図（雲笈七籤卷3）などがあるほか、単なる「式経」の名は、黄帝竜首経などにも多く見られる。また、禽変も、平安時代の滋野貞主の祕府略に「式経三十六禽変」とあることから、式経の篇名ではないかと推測できる。

左慈相決・相祕決は、宋史芸文志、五行の部に「左慈助相規誠1巻」と、それに類する書名が記されているが、これは、道蔵闕経目録に「左慈真人助規戒」とあるものと同じものであろう。また、史蘇亀経・柳世隆亀経などの「亀経」の類も、黄帝竜首経などに、その引用を多く見る。更に、相書・相経・禄命書・禄命決などの、これに類する五行書も、道教経典の中には屢々見存する。

五行大義所引のこれらの典籍の文は、道蔵所収の現行本、または道典引用の佚文とは必ずしも同じではなく、また、それらの典籍の多くは、隋書経籍志などの目録類では、五行、または天文の部に記載されているものであって、元来、道教とは関係がなかったものであったかも知れない。併し、後世、それらの五行・天文の書を、そのままの型か、或は少しく改変して「道蔵」中に取り納れ、道教経典の権威化に役立てたのであろう。このようなことから考えても、所謂、道教経典なるものが、如何に多くの五行・天文書などと密接な係わりを持ち、その影響を受けたかが解る。

このような中であって最も注目すべきものは、医方の類であろう。道教は、元来、「不老長生」という現世的な慾望を希求する傾向の強い宗教である。そこで、当然、人間がその「不老長生」を実現し、または、その実現の障害となる病気を治療するためには、如何にすべきかが重要な課題となり、養生の書、即ち医方の書と密接な関係を持つことになる。五行大義中には、この医方の書の引用も多く、それには黄帝素問・八十一問・黄帝甲乙経・黄帝養生経などがある。

黄帝素問⁽²²⁾は、「論五行及生成数」に1条、「論配五色」に1条、「論配音

声」に1条、「論配五蔵」に5条、「論人配五行」に1条と、割合に広い範囲に亘って9条もの引用が見られる。この漢方医学の基礎理論を述べた黄帝素問は、既に漢書芸文志（方技略・医経）に「黄帝内経18卷・外経37卷」と記されているのを始め、隋書経籍志（医方）に「黄帝素問9卷，梁8卷」と、旧唐書経籍志に「黄帝素問8卷」と、新唐書芸文志に「王冰注黄帝素問24卷・积文1卷・全元起注黄帝素問9卷」と、宋史芸文志に「黄帝内経素問24卷 唐王冰注 素問8卷 隋全元起注」と、それぞれあり、道蔵，太玄部にも「黄帝内経素問50卷」が収められている。また、日本には隋（楊守敬の日本訪書志では唐としている）の楊上善が「内経」を祖述した「黄帝内経太素30卷（第1. 4. 7. 16. 20. 21の7卷が欠けている）が、京都，仁和寺に蔵されている。これらの諸本の関係に就いては、今は触れないが、王冰の「黄帝素問24卷」を基礎とし、北宋仁宗朝の嘉祐年間（1056～63）林億・高保衡等によって校訂された現行「本重広補註黄帝素問20卷」（四部叢刊本）81篇の本文と五行大義所引の黄帝素問とを校比すると、若干の相違が認められる。例えば、五行大義卷3，第14，論雜配，4論配蔵府では

素問云、肝者為將軍之官，謀慮出焉，心者為主守之官，神明出焉，脾者倉廩之官，五味出焉，肺者相傳之官，治節出焉，腎者作強之官，伎巧出焉。

とあるのに対し、四部叢刊本には、

心者君主之官也，神明出焉，肺者相傳之官，治節出焉，肝者將軍之官，謀慮出焉，胆者中正之官，決斷出焉，膻中者臣使之官，喜樂出焉，脾胃者倉廩之官，五味出焉，大腸者伝道之官，變化出焉，小腸者受盛之官，化物出腸，腎者作強之官，伎巧出焉，三焦者決瀆之官，水道出焉，膀胱者州都之官，津液蔵焉，（卷3，靈蘭秘典論序第8）

とあり、五行大義所引が、五臓に就いてのみ述べているのに対し、四部叢刊本は、十二臓（十二官）に亘って記している。これは、或は五行大義が省略したのではないか、とも推測できるが、五行大義所引は、五行相生の順序に拠って五蔵を列記し、それぞれの機能を述べており、それなりの統一がある。併し、四部叢刊本の記述は、五臓と六腑を混じていて統一がない。これは四部叢刊本が原本を改変したのではないか、とも考えられる。その他の五行大義所引の黄帝素問も四部叢刊本とは異なる処が多く、また、その引用は20巻中の巻1・2・3

のみに限られている。今、それぞれの条の検討は煩瑣になるので止めるが、それらを通して見ると、五行大義所引の黄帝素問は、六期末の型を忠実に伝えた信頼のおけるものと思われる。

次に八十一問は、卷3，論配五藏に

○八十一問云，五藏俱等，心肺独在鬲上何。対曰，心主氣，肺主血，血行脈中，氣行脈外，相随上下，故令心肺在鬲上也。

○八十一問云，藏各有一，腎独兩者何也。左者腎，右者命門，命門者精神之所会也。

の二条が引用されている。この「八十一問」なる書名は、歴代の目録類には見存しないが、道藏，太玄部に「黄帝八十一難經」という類似する書が収められている。そこで、その書を見ると、前者は、卷4の32難に、後者は、卷5の36難に殆んど同文が存する。すると、八十一問とは、黄帝八十一難經であることが解る。この書は、隋志には「黄帝八十一難經2卷」と、旧唐志には「黄帝八十一難經1卷，秦越人撰」⁽²³⁾と、新唐志には「秦越人撰黄帝八十一難經2卷」と、宋志には「秦越人難經疏13卷」「宋庭臣黄帝八十一難經注积1卷」と、それぞれ記されているが、何れも「八十一難經」に作っていて「八十一問」としている例はない。しかし、五行大義では、両処とも「八十一問」としているので、蕭吉の時には「八十一難經」を「八十一問」とも名付けていたのではなからうか。

黄帝甲乙經⁽²⁴⁾は、隋志に「黄帝甲乙經10卷，音一卷，梁有12卷」とあり、また新唐志にも「黄帝甲乙經12卷」とある。併し、四庫提要では、この甲乙經は、新・旧唐志に「黄帝三部針經13卷(新作12卷)皇甫謐撰」とあるもので、現存の「甲乙針灸甲乙經12卷，晋皇甫謐」または「鍼灸甲乙經12卷，晋皇甫謐撰」が、それに当る、と述べている。五行大義所引の5条の黄帝甲乙經の文も、何れも現存の晋の皇甫謐の撰とされる「鍼灸甲乙經」と、若干の文字の異同の存するほかは、それ程の差はない。すると、隋代では「鍼灸甲乙經」を「黄帝甲乙經」と呼び、この引用文も、その当時の型を伝えたものと言える。

最後に黄帝養生經は、歴代の目録類には、その名がなく、現存本にも、それに相当する書がない。しかし、隋志，医方には、「彭祖養生經1卷・養生要集

10巻、張湛撰・黄帝養生經1巻・養生注11巻・養生術1巻・養生要術1巻・養生服食禁忌1巻・養生伝2巻・帝王養生要方2巻、蕭吉撰⁽²⁵⁾・彭祖養生1巻」など「養生」に関する書が極めて多く記されている。だが、新・旧唐志・宋志になると、何故か、これらの「養生」の書の多くがその姿を消している。しかし、一方、道蔵の中には、当然のことながら「養生」に関する書が多く収められている。例えば、洞神部、方法類には、太清導引養生經1巻・太上老君養生訣・養生延命録・彭祖攝生養生論・抱朴子養生論・養生詠玄集1巻・太上保真養生論・養生弁疑訣⁽²⁶⁾など、その数は極めて多い。

そこで、五行大義所引の黄帝養生經の佚文⁽²⁷⁾を検すると、そこに引用されている条は、何れも五臓と五味との関係、または、それに拠って起る人間の疾病と、その治療に就いての記述である。この黄帝養生經の考え方は、そのまま、現存の道蔵中の保生要録、論飲食門・修真秘録、食宜篇・三元延寿参贊書・顯道經（何れも洞神部、方法類所収）などに見られ、五行説に拠って説かれた養生の思想が道教經典に極めて強い影響を及ぼしたことを示している。

七、結 び

数節に渡って、五行大義中の道教經典と、それと関係のある資料を紹介し、それらの資料的価値に就いて若干の考察を試みた。それらを通して見ると、必ずしも五行大義と道教經典の間には、直接的に密接な関係が存したとすることはできない。しかし、道家太平經・道家三皇經などの古道經や、道教的色彩の濃厚な老子河上公注の文が、僅かではあるが引存することも確かであり、また、後に「道蔵」中に組み入れられた五行・天文・医方等の書からの引用も多く存することも見逃せない。これらの事実から推して、両者の関係を全く無視することは出来ないであろう。そこに、少くとも、南朝、梁の後裔であり、後に北朝の北魏・隋に仕官して、南北兩朝に生き、兩朝の学問・宗教の影響を受けた蕭吉と、彼の時代における道教と五行説との係り合いを窺い知ることが可能であると思う。

では、当時における道教と五行説とは、如何なる分野で最も深く結び付いていたであろうか。五行大義中の道經、または、その関係資料を検すると、それ

らの引用文の多くは、巻3「第14, 論雑配」中の「論配気味」と「論配蔵府」の両節に存する条である。この両節は、食物の五味と、それを受け納れる人間の器官である五臓・六腑、その両者の相互の關係に拠って生ずる健康と疾病を論じた項である。それから推すと、道教と五行説は、人間の所謂「養生」を追求すると言う点で、最も深く關係していたと考えることが出来る。人間は、如何にしたら、「不老長寿」を実現できるかを追い求めることが、道教の主要な目的であった。この目的を成就する方法として、中国の自然哲学である五行説が用いられ、それが重要な位置を占めるようになったのであろう。これらの具体的な役割に就いては、稿を改めて論ずることとする⁽²⁸⁾。

〔診〕

1. 五行大義については、拙著「五行大義の基礎的研究」（昭和50年度、文部省出版助成図書、明德出版社刊）及び同「五行大義」（中国古典新書、明德出版社刊）を参照。
2. 前掲「五行大義の基礎的研究」に第三章として述べた。
3. 吉岡義豊博士著「道教経典史論」304頁
4. 福井康順博士著「道教の基礎的研究」第一章道蔵論、六、三皇文と三皇経、参照、
5. 吉岡義豊博士著「道教経典史論」中の「古道経目録」に拠る。以下、これに拠ることが多い。
6. 共に「道蔵」洞神部（575）所収。
7. 三皇経は、洞神經、または三洞経とも呼ばれていた。（福井博士説）
8. 前掲「道教の基礎的研究」第一章、道蔵論、八、三皇経と九天生神章経、参照。
9. 同上
10. 前掲「道教の基礎的研究」第二章太平経、参照、以下同じ。
11. 同上、第二章、太平経、5、現存太平経の来歴、
12. 拙著「五行大義の基礎的研究」序論、一、蕭吉の家系、参照。
13. 拙編著「給食倫理」（昭和52年1月、第一出版社刊）陰陽五行説と中国の食物観中で、この問題に就いて述べた。参照されたい。
14. 楠山春樹教授「老子河上公注の成立」（早稲田大学文学研究科紀第19号所収）参照、以下の論は、この論文に拠るところが多い。
15. 老子河上公注の諸本の集成及び校勘には、藤原高男教授の「老子河上公注鈔本集成（上下）」（高松工業高等専門学校研究紀要第8及び第9号）「老子河上公注鈔本集成校勘記（上・下）」（同、第10及び11号）がある。本論も、それに拠った。
16. 以下の河上公注の校勘は、前掲の藤原高男教授の論文に拠る。
17. 楠山春樹教授は、前掲の論文で、「蕭吉の見た河上公注は、おそらく現行本であ

ろうと解せられる、としながらも、また、一つの異本であったともされている。

18. 前掲の楠山・藤原両教授の論文、参照。
19. 蕭吉の伝に就いては拙著「五行大義の基礎的研究」序論、一、蕭吉の家系、及び二、蕭吉の略伝、参照。
20. 前掲の拙著、「五行大義の基礎的研究」第三章、参照。
21. 前掲の「老子河上公注の成立」参照。
22. 黄帝素問については、四庫全書総目提要巻103、子部13、医家類1に記されているほか、「中国の科学」（中央公論社刊、世界の名著、続I）の中に藪内清博士の解説（p.76～93）があり、また、拙著「給食倫理」（第一出版刊）後篇、「陰陽五行説と中国の食物観」の中にも触れてある。
23. 四庫全書総目提要には「難経本義2巻、周秦越人撰、元滑寿注」とあり、越人とは、史記に見える扁鵲であるとしている。
24. 四庫全書総目提要には「甲乙経8巻、晋皇甫謐撰」とある。
25. 蕭吉の「帝王養生要方」については、拙著「五行大義の基礎的研究」序論、三、蕭吉の著書、の項で述べた。
26. これらの道教の養生の書の一部は、今、執筆中の「食経」（明德出版刊、中国古典新書）の中に収め、解説を施す予定である。
27. 黄帝養生経の佚文に就いては、拙著「給食倫理」（第一出版刊）後篇、陰陽五行説と中国における食物観、（B）食物と陰陽五行説、7、病氣と食物〔五養〕及び〔五禁〕の項で紹介し、その解説を試みた。同書（p.181～184）を参照されたい。
28. 前掲の拙著「給食倫理」後篇、陰陽五行説と中国における食物観、の中でも若干触れ、また、今、執筆中の「食経」（中国古典新書。明德出版刊）の中でも紹介する予定であり、更に、この問題は、他でも論じたいと思っている。

（昭和51年9月15日稿）

〔附 記〕

この論考の一部を、昭和51年11月13日、京都の仏教大学で開催された日本道教学会第27回大会で、「五行大義中の道教関係資料について」と題して発表した。その折、岡山大学大淵忍爾教授、早稲田大学楠山春樹教授、東京大学福永光司教授、大正大学吉岡義豊教授から、それぞれ特に「老子経」の理解の点で、賛否両論の御教示を頂いた。これらの問題に就いては、この論考では触れることは出来なかったもので、それらの御教示を考慮し、稿を改め「東方宗教」（日本道教学会刊）第49号に「五行大義中の道教関係資料について」として掲載するとことになっている。（昭和52年2月10日記）